
伝説の木の下で

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の木の下で

【Nコード】

N3908M

【作者名】

るうね

【あらすじ】

その木の下で告白すれば、その恋は必ず成就する……。。

「どけ、その木を燃やす」

「いいや、そういうわけにはいかん」

二人の男が言い争っている。片方は美男、もう片方は醜男^{ぶおとし}。

「こんな木があると、俺たちが迷惑するんだ」

そうだそうだと声がかかる。美男の後ろに集まっている人の群れ。それぞれが見目麗しい男女だ。

「何を言う、この木こそ我らの希望なのだ」

その通りだ、と怒声に近い大声。醜男の後ろにも男女の群れ。それぞれ、あまり見栄えのいい顔立ちではない。率直に言って、不細工だ。

彼らが話している「木」とは、不細工集団の後ろに立っている大木。不細工集団は、その木を守るように横に広がっている。その外側を、美形集団が取り囲んでいた。手に手にたいまつを持ち、憎々しげに不細工集団とその後ろの木を睨んでいる。

「その木の下で告白すれば、どんな恋も成就する」

吐き捨てるように、美形集団のリーダーが言った。

「そんな木があるおかげで、俺たちのうち何人も望まぬ恋の奴隷と成り果てた」

木の近くには井戸があり、そこで水を得なければ、生活していけない。水を汲みに来たところを狙って告白されれば、抵抗のしようがないのだ。このあたりには他に水場もなく、必然、移住できるような村もない。

「もうたくさんだ。偽りの恋に陥れられるのは」

「何を言う！」

不細工集団のリーダーが、大声で反駁^{はんぱく}する。

「それでもしなければ、貴様らは俺を、俺たちを恋の対象とは見てくれぬではないか！ いや、恋の対象どころではない！俺たちを

人間とさえ見てくれないだろう！」

「その通りだ。畜生を恋の対象になど見れるか」

「畜生？ 畜生と言ったな、貴様！」

「人語を解するというだけで、容貌は畜生のそれだろうが。鏡を見
てみるがいい、その勇気があるのならな」

「……分かった」

すっ、と不細工集団のリーダーの顔から表情が消えた。声も低く、
冷たくなる。

「もういい。貴様は死ね」

彼は、いきなり懷からこん棒を取り出し、美形集団のリーダーの
顔を殴りつけた。整った顔立ちが、一瞬で弾けたザクロのようにな
る。美形集団から悲鳴が上がった。

「見ろ！」

不細工集団のリーダーは、満面に喜色を浮かべ、倒れこんだ美形
集団のリーダーの顔を何度も殴りつける。

「こいつの方がよほど醜い！ 死んでしまえば、顔形の美しさなど」
言葉の途中で、彼の顔面が弾けた。美形集団の一人が、血に染ま
った鉄の棒を手に、半ば呆然として立ち尽くしている。不細工集団
のリーダーが倒れた。皮肉にも、あれだけがみ合っていた美形集
団のリーダーと同じように、ぐちゃぐちゃに崩れた顔を、二人仲良
く並べることとなった。

混乱は収まりそうもない。あちらで、不細工集団の一人が美形集
団の顔を包丁でずたずたにすれば、こちらでは、美形集団が鎌で
不細工集団の喉笛を切り裂く。悲鳴と怒号と血臭と脳漿と。誰もが
誰かを殺し、誰もが誰かに殺される。

そんな中、美形集団の男が一人、木にたどりついた。すでに満身
創痍で、意識も朦朧^{もうろう}としているようだ。男は、懷から油壺を取り出
して、木に近づいていく。

「待って！」

その前に、一人の醜女^{しじめ}がナイフを手に立ちふさがった。

「どいてくれ」

「嫌です!」

男の言葉に、醜女は激しく首を振る。

「こんな木はない方がいい。苦しむ人が増えるだけだ」

「だって、この木がなくなれば、わたしの恋は決して叶わない! わたしは、わたしはあなたのことが……」

「よせ! 言うな!」

「わたしは、あなたが好きです!」

醜女の言葉に、男は悲しげに首を振った。哀れみを含んだ目を、醜女に向ける。

「俺も、さ」

「……え?」

「俺も君が好きだ。いや、好きだった」

「な……」

「こんな木の力に頼らなくても、俺は君が好きだったんだ」

「あ、ああ……そんな、そんな」

醜女は、自分の犯した取り返しのない過ちに、絶望の呻うめき声をもらした。男の恋は本物だった。それが、この木の下で告白したことにより、まがい物の恋に成り果ててしまったのだ。

ぐらりと男の身体が傾き、地面に倒れる。何度か痙攣し、動かなくなった。

しばらく、醜女は呆然と立ち尽くしていた。やがて、ゆっくりと男の死体に歩み寄る。その手から油壺を取ると、中身を木に振りかけ、火をつけた。みるみるうちに、炎は大きくなり、木全体を飲み込む。

それを見届けると、女は自分の首にナイフを突き立てた。自分が愛した男の死体に重なり合うように倒れ、絶息する。

ごうごう、ごうごう。

木は燃えている。

その下で動くものは、すでになかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3908m/>

伝説の木の下で

2010年10月10日02時56分発行